

非行少年のロールシャッハ反応

高 橋 雅 春

The Response of Juvenile Delinquents in the Rorschach Test

Masaharu Takahashi

目 的

非行を行つた青年期の男子少年の人格特性を知る目的で、ロールシャッハ検査を行った。それは(1)正常少年と非行少年の間に如何なる反応差異が存するか。(2)非行少年の中、ヒロポン嗜癖少年と精神薄弱少年の各々と窃盗を行う普通知能の少年の間に反応差異が存するか。(3)各群に特異な反応型が存しているか。の三点について検討しようとする。

被 検 者

第1表に示したように男子高校生100人、窃盗少年200人、ヒロポン嗜癖少年70人、精神薄弱非行少年100人の計470人に個人検査を行った。高校生をのぞいた被検者はいずれも少年鑑別所に非行を行つて収容されたものである。特にヒロポン嗜癖少年は入所時、禁断症状がみられたものに限り、この症状がとれて数日後に検査を行った。それ以外の非行少年は入所後約一週間目に行ったものである。各群の年齢、I. Q. は表の通りである。尚、()内はいずれも標準偏差である。

第1表 被 検 者

	窃 盗	高 校 生	ヒ ロ ポ ン	精 薄
人 員	200	100	70	100
年 齢	17.6(1.5)	16.5(1.5)	16.2(2.2)	17.2(1.5)
I Q	90.2(12.0)		83.8(11.2)	53.2(11.0)

手 続

検査結果の整理に当っては、主に Klopfer の方法によつた。基準を窃盗少年におき、之と各群の反応を比較することにした。

考 察

本研究の目的を考察する為、次の二つの数値より検討した。即ち(1)テストを整理した結果の記号での分布を仮に、正規分布をしていると考えて、平均値の差の検討を一応試みた。この結果が第2表であり、各群を窃盗群と比較し、5%の有意水準で差のあるものを○、差なきものを×で示した。この表は各群の大体の傾向を知りえよう。しかし、ロールシャッハの各記号の

第2表 平均値とその差の検討 () 内は標準偏差

	窃 盗		高 校 生		ヒ ロ ボ ン		精 神 薄 弱
R	23.3 (8.8)	○	38.0 (16.7)	×	23.6 (9.5)	○	20.7 (8.5)
W %	45.1 (23.2)	×	41.8 (26.3)	×	48.5 (23.0)	○	29.5 (20.4)
D %	46.1 (20.5)	×	45.5 (19.5)	×	43.8 (20.0)	○	52.5 (18.6)
d %	4.2 (5.6)	×	4.2 (5.2)	×	3.1 (3.7)	○	7.4 (8.3)
Dd %	3.2 (4.2)	×	4.3 (6.2)	×	3.8 (4.6)	○	8.6 (11.5)
S %	2.5 (3.6)	○	3.9 (4.3)	×	2.9 (4.6)	×	2.3 (4.0)
F %	65.7 (17.2)	○	58.1 (13.2)	×	66.4 (18.4)	○	81.8 (16.0)
F + %	77.8 (14.5)	○	88.2 (8.9)	○	73.2 (15.2)	○	62.7 (18.3)
M	1.4 (1.8)	○	3.0 (2.2)	×	1.2 (1.5)	×	0.3 (0.6)
FM	2.3 (2.3)	○	3.0 (2.4)	○	1.6 (1.9)	○	1.0 (1.0)
m	0.1 (0.2)	×	0.3 (0.6)	×	0.2 (0.5)	×	0.1 (0.3)
FC	0.8 (0.9)	○	3.5 (2.1)	×	0.6 (0.9)	○	0.3 (0.6)
CF	1.4 (1.6)	○	1.0 (1.2)	×	1.9 (1.6)	○	0.8 (1.2)
C	0.2 (0.7)	○	0.0 (0.4)	×	0.3 (0.8)	×	0.4 (1.1)
C'	0.4 (0.8)	○	1.6 (1.4)	×	0.6 (0.8)	×	0.5 (1.1)
c	0.8 (0.3)	○	1.7 (2.0)	×	0.8 (1.0)	○	0.2 (0.5)
K	0.7 (1.2)	○	1.7 (1.7)	×	0.8 (1.4)	○	0.2 (0.4)
A %	56.4 (18.6)	○	46.5 (12.8)	×	51.5 (19.4)	○	63.7 (22.8)
H %	9.6 (7.1)	○	13.1 (6.4)	×	10.1 (9.0)	○	7.1 (8.8)
At %	4.7 (7.0)	×	4.5 (5.1)	○	7.7 (8.2)	×	6.0 (8.8)
Pl %	8.0 (7.4)	○	4.1 (4.1)	×	9.5 (9.1)	×	7.8 (11.4)
Ob %	6.0 (6.7)	○	12.3 (3.8)	×	7.2 (7.8)	×	5.5 (8.1)
Cl %	1.0 (2.5)	×	1.0 (1.5)	×	1.3 (4.0)	×	1.2 (2.7)
N %	3.2 (6.4)	×	3.8 (3.8)	×	3.0 (6.0)	×	3.2 (5.6)
Geo %	1.6 (3.4)	×	1.9 (3.5)	×	2.2 (4.4)	×	0.9 (2.9)
P %	24.9 (10.1)	○	16.0 (7.1)	×	23.5 (10.6)	○	16.9 (9.3)
O %	15.8 (10.2)	×	15.0 (8.5)	×	18.8 (12.1)	○	32.3 (16.1)
P	5.2 (2.1)	○	5.6 (1.8)	×	5.0 (2.2)	○	3.1 (1.8)
O	3.9 (3.5)	○	6.7 (3.9)	×	4.7 (4.0)	○	7.1 (2.3)

分布は必ずしも正規分布をしていないので、(2) χ^2 検定を用いた。第3表に示した経験型の如きは、そのまま χ^2 検定をなしうるが、各記号についての取扱いが問題となる。そこで男子高

第3表 経 験 型

	窃 盗	高 校 生	ヒ ロ ボ ン	精 薄
内受型	34人 (17.0%)	○ 27人 (27.0%)	× 9人 (12.9%)	○ 0人 (0%)
外受型	69人 (34.5%)	× 28人 (28.0%)	○ 34人 (48.6%)	× 34人 (34.0%)
等価型	32人 (16.0%)	○ 40人 (40.0%)	× 8人 (11.4%)	○ 5人 (5.0%)
収縮型	65人 (32.5%)	○ 5人 (5.0%)	× 19人 (27.1%)	○ 61人 (66.0%)

校生は一応、社会に適応しているものと考え、男子高校生の平均に1シグマを加減したもののよりの逸脱をみることにした。第4表がこの基準表である。この表からの逸脱について、各被検

第4表 高校生平均 + 1σ

		平均域				平均域	
R	—	21 ~ 55	+	M < (FM+m)		アルモノ	✓
W %	—	26 ~ 68	+	K + KF		アルモノ	✓
D %	—	26 ~ 65	+	c + cF		アルモノ	✓
d %		0 ~ 9	+	A %	—	34 ~ 59	+
Dd %		0 ~ 10	+	H %	—	7 ~ 20	+
S %		0 ~ 9	+	At %		0 ~ 9	+
F %	—	45 ~ 71	+	Pl %		0 ~ 8	+
F + %	—	79 ~ 97	+	Ob %	—	9 ~ 16	+
Sum C	—	1 ~ 5	+	P %	—	9 ~ 23	+
C		アルモノ	✓	O %	—	6 ~ 23	+
FC < (CF+C)		アルモノ	✓	拒 否		アルモノ	✓
M	—	1 ~ 5	+	Sex		アルモノ	✓

者のテスト結果を処理したものが第5表で、数字は人員をあらわしている。◎は χ^2 検定の結果、5%水準で、○は10%水準で、窃盗群と比べて有意の差があるもので、×は差なきものである。この第3・4・5表の数値から、各群の反応差が知られるので、この点について考察する。

第5表 逸 脱 表 ()内は%

	窃 盗	高 校 生	ヒ ロ ボ ン	精 薄
R	+	3 (1.5)	◎ 13 (13.0)	× 0
	—	91 (45.5)	◎ 13 (13.0)	× 28 (40.0)
W %	+	37 (18.5)	× 23 (23.0)	○ 20 (28.6)
	—	46 (23.0)	× 25 (25.0)	× 13 (18.7)
D %	+	35 (17.5)	× 13 (13.0)	× 7 (10.0)
	—	40 (20.0)	× 23 (23.0)	× 20 (28.6)
d %	+	20 (10.0)	◎ 23 (23.0)	× 8 (11.4)
Dd %	+	17 (8.5)	× 12 (12.0)	× 8 (11.4)

S %	+	8 (4.0)	⊙	14 (14.0)	×	3 (4.3)	×	7 (7.0)
F %	+	81 (40.5)	⊙	15 (15.0)	×	28 (40.0)	⊙	74 (74.0)
	-	26 (13.0)	×	11 (11.0)	×	10 (14.3)	×	10 (10.0)
F + %	+	15 (7.5)	⊙	21 (21.0)	×	3 (4.3)	×	9 (9.0)
	-	86 (43.0)	⊙	14 (14.0)	⊙	45 (64.3)	⊙	78 (78.0)
Sum	+	20 (10.0)	×	9 (9.0)	⊙	14 (20.0)	×	8 (8.0)
	-	66 (33.0)	⊙	12 (12.0)	⊙	10 (14.3)	○	45 (45.0)
C	✓	30 (15.0)	⊙	6 (6.0)	×	14 (20.0)	×	19 (19.0)
FC < (CF+C)	✓	89 (44.5)	⊙	9 (9.0)	⊙	50 (71.5)	×	42 (42.0)
M	+	10 (5.0)	⊙	13 (13.0)	×	1 (1.4)	×	0 (0)
	-	76 (38.0)	⊙	9 (9.0)	×	30 (43.0)	⊙	81 (81.0)
M < (FM + m)	✓	104 (52.0)	×	47 (47.0)	×	35 (50.0)	×	52 (52.0)
K+KF	✓	53 (26.5)	⊙	12 (12.0)	×	23 (32.6)	×	21 (21.0)
c + cF	✓	14 (7.0)	×	5 (5.0)	×	9 (12.8)	×	2 (2.0)
A %	+	95 (47.5)	⊙	15 (15.0)	○	25 (35.7)	×	54 (54.0)
	-	16 (8.0)	⊙	17 (17.0)	⊙	13 (18.7)	×	14 (14.0)
H %	+	27 (13.5)	×	17 (17.0)	×	8 (11.4)	×	11 (11.0)
	-	80 (40.0)	⊙	25 (25.0)	×	33 (47.2)	⊙	58 (58.0)
At %	+	29 (14.5)	×	12 (12.0)	⊙	21 (30.0)	×	21 (21.0)
Pl %	+	77 (38.5)	×	29 (29.0)	×	33 (47.2)	×	28 (28.0)
Ob %	+	17 (8.5)	⊙	24 (24.0)	×	9 (12.8)	×	3 (3.0)
	-	130 (65.0)	⊙	22 (22.0)	×	40 (57.2)	○	77 (77.0)
P %	+	97 (48.5)	⊙	12 (12.0)	×	27 (38.6)	⊙	19 (19.0)
	-	8 (4.0)	×	1 (1.0)	×	2 (2.9)	⊙	18 (18.0)
O %	+	55 (27.5)	○	18 (18.0)	×	23 (32.9)	⊙	72 (72.0)
	-	30 (15.0)	×	12 (12.0)	×	9 (12.8)	⊙	3 (3.0)
Sex	✓	9 (4.5)	×	1 (1.0)	○	7 (10.0)	×	3 (3.0)
拒否	✓	64 (32.0)	⊙	3 (3.0)	×	21 (30.0)	×	43 (43.0)

(I) 窃盗少年と高校生

反応総数 (R) が非行少年に少いのは、いろいろ考えられるが、非行少年がテスト場面を權威に対するものと考え、気乗りが薄い事と、知的に想像力が少い事が考えられる。

位置反応については、往々述べられるのと反対に、S %は学生に高い。これはd %の高い者が学生に多いことと共に、むしろ或る場面を他の見地から眺めようとする意志力や人格の可塑

性をあらわすといえよう。即ち位置反応からは窃盗少年の人格の動きが硬く、批判力・自発性に乏しいことが知られる。

決定因子からみる時、学生の方に変化が多いのは、彼等が豊かな感情体験を持つからであろう。この事は経験型(第3表)が等価型になるのに対し、窃盗少年は形態反応(F%)が高く、収縮型に傾いていることから知られる。更に目立つのは学生が人間運動反応(M)をえらぶほど非行少年は人間運動反応(M)をえらばないことである。之に反して外受型の生起する率は窃盗群に多く、而も形態色彩反応(FC)よりも色彩形態反応(CF)に傾いていることが目立つ。これは非行少年が、外界からの影響に敏感で情意が不安定であり、内省力を欠き、未成熟な精神構造をあらわしている。また明暗反応(c, K)や無色彩反応(C')も学生の方に多いが、Fc・FK・FC'の形で不安を一応解消している。之に反し、窃盗少年はc・K・C'の形で愛情の阻害感や不安感を解消していない。

内容からみる時、窃盗少年は人間反応(H)が少く、動物反応(A)が多いことに先ず気付く。即ち窃盗少年は対人関心が少く、生活態度として安易さを求め、ややもすれば常同的傾向をとり、場面の變化に順応しえないのであろう。また種々の事物(Ob)を意味づけないのは、窃盗少年の生活空間が分化しておらず、興味の範囲が狭いからと言えよう。また植物反応(PI)が多い傾向がみられる。植物反応は一般に児童に多いことから、窃盗少年の発達の未熟を知る。

独創反応(O)が高校生に多いのは、その知的水準から考えられるところである。一般反応の率(P%)が窃盗少年に多いのは、総反応数の少さで、実数では大差がみられない。

(II) 窃盗少年とヒロポン嗜癖少年

第2表の平均値についてみると、両者の差異は殆んどみられないが、第5表による時、やはり反応の差異に気付く。

位置反応で全体反応(W%)の高い者が多いが、質的に検討すると必ずしも良好でなく、むしろヒロポン嗜癖少年は直観的思考をなし、漠然と場面を把握するのである。

決定因子で良形態反応(F+%)が低いのは、やはりヒロポンのための情意障害があり、現実を正しく把握しえず、自我水準が低下していることを示している。更に窃盗少年以上に色彩反応に傾き、外受型が目立ち、情意が著しく不安定で、窃盗少年よりも感情を制御しえず、興奮し易く、より未熟な発達段階に退行していることを知りうる。

内容からみると動物反応(A%)が少い。これは他の因子と共に考える時、学生とちがって、即行的で動揺し易い性格特性とみるべきであろう。また解剖反応(At%)の高い者が多い。解剖反応については不安な感情ともいえようが、むしろ身体への顧慮と考える方がよいであろう。また性反応(Sex)を有する者が多いのは、動物的欲求を制御する力を失い、また社会の禁じるものを無視するということを表している。

これらからみる時、ヒロポン嗜癖少年は窃盗少年に比べて自我水準が低くなり、より幼稚な

発達段階に退行し、感情・欲求への制御力を失い、即行的行動をとり易く、また自らの身体への顧慮が昂まっているといえよう。ただここに述べたヒロポン嗜癖者は、幻覚を生じるほど中毒が進んでいない故でもあろうが、窃盗群の反応と著しく違っているとは言えない。その点からみても、窃盗に走る少年とヒロポンを使用する少年の間に、本質的な性格的差異は存していないと考えられる。両者の間には共通の性格的基盤が存していると言えよう。

(Ⅲ) 窃盗少年と精神薄弱非行少年

同じように窃盗を行っても普通知に近い者と、精神薄弱域の者では、ロールシャツハ検査結果にかなりの差異がみられる。

位置反応は知的な面を示すといわれているが、精神薄弱非行少年は全体反応(W)よりも小部分反応(d)や細部分反応(Dd)に傾いており、反応数(R)も少い。即ち彼等は、客観的に場面全体を洞察しえず、日常生活に余り関係のないものに関心を持ち、主観的に思考する。

経験型では収縮型がもっとも多いのは、窃盗をする普通域の知能少年よりも遙かに興味の範囲が限られ、生活空間が狭いといえよう。特に決定因子で人間運動反応(M)が少いのは、その知能の低さから当然生じるものである。

内容として、人間反応(H)が少く、動物反応(A)が多いことも多くの研究者によってふれられた通りである。ただ図版の拒否の存在とA%の高さは、非行少年に於て知能の高低を示す指標として不十分である。

また一般反応(P)が低く、不良独創反応(O-)に傾くのも、当然理解しうる処である。即ち思考が建設的な獨創性を伴うのでなく、変った思考をなし、集団の多くのものとの不一致を示している。

(Ⅳ) 反応型の試み

上述の如く、ロールシャツハ検査結果は一応各群の大体の傾向を示している。次に先の基準表から逸脱した項目の組合せを検討し、いずれかの臨床群で大体10%以上みられる反応型を組合せた。その結果は第6表の通りである。

我々がロールシャツハ検査の結果を解釈するに当っては、一つの記号からのみでなく、記号

第6表 臨床反応型 ()内は%

型	内 容	臨 床 的 意 味	窃 盗	学 生	ヒ ロ ポ ン	精 薄
I	C, ✓ FC < (CF+C), ✓ F+%, -	情意不安定で興奮し易く衝動的になり易い	15 (7.5)	2 (2.0)	13 (18.6)	15 (15.0)
II	R, - Sum C, - M - F%+ A%, + 拒否, ✓	生活空間が狭く、自発性を欠き、情意の動きに鈍い。また知的な面に劣り、常同的になり易い。	18 (9.0)	1 (1.0)	4 (5.7)	16 (16.0)

III	Sex, ✓ At%, + F+%, -	社会規範を無視し, 性的欲求にひかれ, 自分の身体に気をとられる。	5 (2.5)	0 (0)	6 (8.5)	3 (3.0)
IV	A%, - FC<(CF+C), ✓	必要な固執性なく, 即行的に感情のままうごく。	13 (6.5)	1 (1.0)	7 (10.0)	6 (6.0)
V	FC<(CF+C), ✓ M<(FM+m), ✓ M, - H%, - A%, +	精神発達が未成熟で対人関心がなく, 自己本位で, 欲求の制御を欠く。	15 (7.5)	0 (0)	4 (5.7)	5 (5.0)
VI	O%, + F+%, - 拒否, ✓	常人と偏倚した思考をする。	10 (5.0)	0 (0)	4 (5.7)	20 (20.0)

全体の布置との関係から解釈するのが普通である。その意味で他の記号との組合せを考慮して反応型を考察したのである。

各反応型で最も多い臨床群と学生群との差はI型の5%を除いて、いずれも1%の有意水準で有意の差を示している。この型からみても各臨床群の特色は知られよう。最も対照的なのは、ヒロポン嗜癖少年が著しい情意の不安定と衝動性を示し、自己の身体に関心を持ち、社会規範を無視しようとの傾向と、精神薄弱非行少年の感情の動きが鈍く、自発性に乏しいことである。

尤も精神薄弱少年については、I型とII型の出現率は殆んど同じであり、各臨床群とも異った情意傾向の者を含んでいる。尚、それらの型を持つ者と臨床的所見とは可成り一致していた。参考の為、精薄非行少年についてややもすれば活動的で興奮し易いI型と、感情の動きの鈍い消極的行動をとり易いII型の実際行動を調べた結果が第7表である。

第7表 反応型と行動

型	行 動	人数
I	粗暴で興奮し易く, よく喧嘩する	7
	積極的に活動し, 昂揚した感情	4
	おとなしく余り目立たない	4
II	茫然と日を送り, 逃避的行動	9
	消極的でやや受動的	2
	強情でむっつりしている	1
	ほがらかで時々でしゃばる	3

結 論

(1) 男子高校生に比べ、一般に非行を行う少年は人格が硬く、感情生活が貧困で、未成熟な精神構造を示す。知的には批判力を欠き、内省力・自発性なく、新場面への順応性に劣っている。感情的には幼稚で不安定であり、愛情の阻害感や不安感を有している。また生活空間は自己中心的に狭く、興味の範囲が限られ、対人関心が少い。

(2) 非行を行う少年の中、窃盗をする者とヒロポンに走る者が本質的に性格を異にしているとは言えない。両者は類似の性格を持ち、環境の因子によって一方は窃盗をなし、他方はヒロ

ポンを使用すると考えた方がよいといえよう。しかしヒロポンを使用していた少年は窃盗をなした少年よりも、情意障害が目立ち、社会規範を無視するように自我水準が低下し、興奮し易い。即ち窃盗少年に比べて非常に不安定で即行的になっている。また当然乍ら自らの身体についての心配をあらわしている。

(3) 普通知の窃盗少年と精神薄弱の窃盗少年を比べる時、非行を為さぬ正常人と精神薄弱者にみられるロールシャツハ反応の差異が同様に認められる。但し、拒否の存在と動物反応(A%)の多さは、非行少年の場合、必ずしも低知能を示す指標とはならない。群として最も人格が硬く、現実を正當に把握しえず、異常な思考方法をとるのは精神薄弱少年であった。

(4) 一応仮定した正常域から逸脱した記号の組合せによって6つの臨床反応型が知られた。その意味する処と臨床的所見はかなり一致しているといえよう。

本研究に当って、特に男子高校生の資料収集に当っては、天理大学講師河合隼雄氏の助力を受けたことに感謝の意を表わしたい。

(本研究は昭和30年度文部省試験研究費によって行ったものである)